



# 国交省の「転向」

国土交通省は7月6日、「あらゆる関係者により流域全体で行う『流域治水』への転換」を掲げ、「総力戦で挑む防災・減災プロジェクト」を発表しました。計87の

プロジェクト施策一覧に「ダム建設」「スーパー堤防」の文言は見当たりません。

「河川の持つ多様な自然環境や水辺空間に対する国民の要請の高ま

★次号の11月の発行日は8月22日です。

りに応える為、河川管理の自的として「治水」「利水」に加え「河川環境」（水質、景観、生態系等）の整備と保全を位置付け」た平成9年河川法改正から紆余曲折23年、「造るから直す・護る、そして創る。」へと、原点回帰、ベクトルの証左となるや否や？

全て河道内に封じ込め、可及的速やかに海へと水を流し込む「河道主義治水」。その象徴が、コンクリートで河道を固めた「用水路」に留まらず、天端と呼ばれるダムや堤防の上部、法面と呼ばれる護岸も全て混泥土で塗り固めた「三面張り」。が、効率一辺倒では「治水」は対処し得ぬと悟った旧建設省内の「地動説」派が、レイチェル・カーソン『沈黙の春』を想起させる「河川環境」を、隠れ蓑に方針転換を打ち出したのでした。4年後の2001年2月20日に発した『脱ダム』宣言は、初めて告解しますが「改正河川法」の理念をなぞった俄「門前の小僧」です。

「数百億円を投じて建設されるコンクリートのダムは看過し得ぬ負荷を地球環境へと与えてしまう。更には何れ造り替えねばならず、

その間に夥しい分量の堆砂を、此又、数十億円を用いて処理する事態も生じる」「縦しんば、河川改修費用がダム建設より多額になるうとも、100年、200年先の我々の子孫に残す資産としての河川・湖沼の価値を重視したい。長期的な視点に立てば、日本の背骨に位置し、数多の水源を擁する長野県に於いては出来得る限り、コンクリートのダムを造るべきではない」。

創造的葛藤の「脱ダム」思想を、弁証法とは真逆の原理主義だと未だに断じる「ダム万歳論者」は痛い「天動説」派。何故って、計画発表から67年後の昨秋、総事業費5320億円で利根川支流の吾妻川で試験湛水に漕ぎ着けた八ツ場ダムが利根川水系全体水量の1%を役割分担するに過ぎぬ「不都合な真実」を理解し得ぬのですから。

手足の爪を切るように河道の堆砂を、1m当たり1万円強で地元業者が重機を用いて担当可能な浚渫を小忠実に実施。日本特有の「土堤原則」の美名の下に内部が液状化して越水・破堤を齎す護岸補強の鋼矢板工法。国土の68・2%を占める上流域の森林整備。

知事就任時、本体工事は未着工なのに総事業費の半分以上が冬季五輪ボブスレー・リュージュ会場へのループ橋と隧道建設に「転用」されていたダム予算。善光寺地震（弘化4年1847年 死者8千人）震災に近接する活断層真上の浅川ダム計画。国管理の千曲川の河川改修の遅延が理由で「ダムを造っても合流部一体の内水氾濫は防げない」と県議会で答弁した国交省から出向の土木部長が僕を「覚醒」させます。天井川状態で信越本線の真上を流れていた浅川3km区間を県費で最大11m河道掘削した後、名は体を表す千曲川「立ヶ花」狭窄部での糞詰まりを解消すべく導水路、遊水地一旦緩急の際は調整池として用いる田んぼやリンゴ畑の事前契約を提案するも国交省は尽く拒絶。

が、驚く勿れ、部下の土木部長と共に提案した数々の施策が今回の87プロジェクトに記載されているではありませんか！球磨川氾濫も、人吉市地籍の狭窄部が原因。球磨川水系支流の計画だった川辺川ダムが存在したとしても回避不可能だったのです。心ある国交省官僚よ、隗より始めよ。